

出定笑語講本

津田文庫
文庫 1
1576
1





出定笑語講本一

出定笑語講本一
 出定笑語の大意で演説致す事、先づ第一、天竺
 の國の水土風俗を呈致して其國の始めの傳説由来又釋
 迦一代のありし事、又諸人の佛教一部一冊とて釋迦の
 眞のものであるを殘らず後人の記したるものあるに
 辨して佛法の諸所傳りたる事、夫より佛國傳つて事
 のありし事、又佛國の諸宗の始まり及び其宗者の
 立ちたる事、又佛法の本意又當時せ居る者の佛法の心得方
 杯の事を申すの事、ゴサル但し吾ら師の翁、免角漢學の
 の人心をさく志りたる事、あつたらざる事、さうして
 返り論されし事、たゞ此れとて余り佛法の事をい言ひし
 只



010190606371

聊う計り佛の道といふものハ世の女童を欺く如き
ことあり我ハ論ふも是らぬとの言はるごとし言はた位のこと
又釋迦といふ大をそ人のをそ言ふをそ言洩へて人惑す
も又佛書讀ハをうそと多し獨り笑ひしせられりる
う那是ハ實ハ左様のまけであるを我共今ハやう不行
ハ世て至らぬくまなくせよ有りとある諸事諸道何ハ寄
らず其意の混雜せぬことありやうて又よくまけ
まけねば真面目の見へぬること多しうつて其根本
の釋ハ心得ねばごとしあらす又故ハありまけり其
佛道の真面目を有りの儘ハ申すのハゴザル但ハ此佛道と
申すためのハいと幼き者であるごとし其幼き所ハ人氣

小者ありと見へてせし信して人も多しうは是ハ甚ど申
よくいこととてゴザルある世ハ其信してある人ハ皆佛者
其の爲ハはあられり佛者共らうてさまふ取録して
其誠の事を言ひ聞らせし銘を銀ト也と論し置ことを知
うず其聞洩たるそら言を信じて此方ハ佛經よりて其
正實を言聞うやとハ佛法を謗るあるハ心得以の外ハ腹
を立てゴザル正實の釋をいふとハ謗りと心得坊主のそら
言とハ真と信し居ると云ふハさて迷ひといふものハ
仕方の無いものでゴザル此佛法の真實をいつたあらハお
ころ人ふあらふといふことハ云もぬまうら此方とさ
し心得て居つたる故實ハいふまじいとさし思つゝあると

と言はんてい事いとうりすと先年と心遣ひを去つ、言
た所を果して一席二席聞りて夫を癡ささへた人杯と両
三人有る此方のいふ所の誇るといふものでいふ真の
所といふのいふやう丈程ふ心遣ひをしての演説を誇りと
聞取るゝ扱々白い黒いの分らぬらと、腹さへ立つて言
是ハ譬へい出家の輩のいふ所の淡飯を耳いと云てよひ
氣小成て食ひあつて居たる人小丈と氣の毒いやと云
て真の耳板を喰ひしてとんと喰はず其湯飯小喰ひあ
まてけつゝ其耳板をハ顔と云つめて喰ひ様ふとつて言
我々鈴の屋の翁ふよと此なる歌ふまゝ神の世人の耳を
あぐくらむまことう多きハまぐくくのみまこと讀きた通り

コリヤらの古道の大意小悉々中たる如く神ふも善惡邪正
様々有るゝ其ありく邪ある神ふまづらうと耳をあたふ
と真の事を聞くとあるぬ人々と見へるでゴザル釋迦の縁
あり衆生ハ度一難いと云たのしうやうの人々のこと
もありまやうら其くせ出家の方で云ふ所の御國の神を
ハ佛法の下役の如くいやうめてあるふ夫をハ何とも思
ふんで居るでゴザル扱々古一の神々の天地をさへ小お造
りあそびたる程のことと且ハ思ひあうつては自分
の先祖もやが夫をハ賤しめられ何とも思ふす釋迦
ハ譬へ真小尊きものふも、ち外國の人とやものを夫を
うりこく我先祖とも身の存らしてまゝ我が國の神を見

うへて上るべきもの論は仕つるといふはちやうと我ら
君我の親を捨て他人を尊ぶ其他一人の論は有つて
一らま小我ら君我の親を誇りたまたま自分の親を尊め
としく我ら君我の親を誇りたまたま自分の親を尊めと
勧むる人とさす小憎むやうなものやう返すくも扱々
世小ハ逆さまする心の人とあるものやうと覺へて肩で
息をすする裡のこと下ゴザル然しともそんな邪ある人ハ夫
出ふしておいてどう考へても佛法の事も云はぬはあり
すいでやまふとふつてハ最早の涕ぬうちうを露と
願ふやうとても濡さうといつてハア、儘よきよとふ
ふいとあきらめて誇りハ致さんか其正實といつて佛法

の真事の所と有りの儘小繕り飾らず竹を割たるやう
小申するやう何ともし其お心得て必ず腹を立せぬとい
叔又別段小申すことと有る夫ハ古より唐やまの者
共う我若らと生まらるゝを働いて佛法を論辯誹謗
ハ致したる此とも皆佛書をよく見ず聞えつり見えつり
て彼の胡椒丸のミこと云様小只ハ大に不聲をして云た
くうあのこととてゴザル夫故云ひ常たと見つる論ハ甚だ
んと少ふいひゴザル終て論辯と申す扱ハ我ら家の説を以
て申してハ先で承知ハ致さぬもの下ゴザル是ハ蘇子由と
云ふ漢人の申する諸小善與人言者因其人之言而為之言
則天下之辯者服矣其里人言而曰吾又以為不然則誰肯

信以為爾父之是云々排夫異端而終以不明者惟不務辨其是非利害而以其父屈人也。申したる誠不む云ひたるてゴザル夫故拙者の諸道を論辯致す小儒道の儒書で論じ佛道ハ佛書で論辯致すことゴザル是ハ総て何事小も其本を知て論するるとゴハ向小一まいつたもの何とも云ふ事出来すま本をさめさすれハ先の板葉のことハ何の事とさうりうよく事小うつてハ本をさへ小よく取極せハ末ハ云ハすと聞ずハ自尔さうちと多ハうのらうでゴザル譬ハハ岸をつらさハ不足や尻つぽとこハく小つらまハてハ振返つて食付とすハ所を膈腹の首筋の所をギエツと強くひすどつらると食付にととひつ

ふくことと出来す其中小目玉ハ飛出すよふものゴザル夫故此方の演説ハ餘り細うし事ハ云ひませんうら其にまハる事ハ夫小准ハ知つて事でゴザル扱まつ天竺國ハ誰も知ての通り御國うらハ漢土を隔てハ西の方小在る國下即ち西洋人の五大洲と名けたる其第一の亜細亞と立たる洲の内ゴザル扱其國うらの事ハ世の嗚呼人共ハ何う結構不國の中う小心得違ひをハ居るハ其共廣ハ唐土よりハ示餘程悪ハ國下ゴザル然ると坊主共のそれをよさまふ取るハて云ふハさうした事トやと云ふ小是ハちやうと漢學者ハ何とも漢土うらいくと具貞すうと固く事で自分の業とする道の本尊釋迦法師ハ本

國故取繕ひての事下ニル又中ノハ廣シ天竺ハよい國ト
ヤトナリ心得て居た僧ト昔ナラ教ラト有つたこと下ニ
夫等が言觸た事共ニ世ニ弘まつて尋常の學問せぬ人杯
ハト人ト誠の事ト心得たものでゴナル中ノ甚しきハ天竺
と天^チヨクと覺へて直ニ青ク見ゆ空の事トヤト心
得て跋々朝鮮ニウ漢土一夫ニウ行々す世ニ行せしする
事の極小心得て居る者ト多くナラハハありてゴナル
依て今證^チ抑正しく彼國ナラの事ト分りてゴナル扱
佛法の譯ととくのハ其國ナラの事ハナラぬ様小思ハル
衆トあらうリだが一體國々の道々トワル物ハ其國相應
小組立たる事不多ニ故其國風の譯ト心得て居らぬト云

ナラぬ事ト受引^チ難シ事トヤト思ハ様有譯ト有るもの
下ニゴナル夫故ありウ申すのでゴナル扱扱と致して申すもの
ハ大唐西域記ト云ハ物でゴナル此書ハ漢土で唐の代ト云
つた時今小其二代目の太宗ト云ハ王の貞觀三年ト云ハ
年皇國の舒明天皇元年の八月小玄奘法師ト云ハ僧ト有
つて佛法でも所謂大乘ト云ハ高い所ニ傳へたこと云つ
て漢土よりハ何千里の難所を越て天竺の國ニ往つて國
中悉く歩いて搜へ事として見た事聞たりまた國風惣傳
の事と具小記して來て扱同十九年正月小本國ニ歸つて
取て歸つた所の佛經ハ元より今の國風惣傳と記して來
リたる書トも其王太宗ニ奉つたが夫ハ此大唐西域記で

此功不依て佛法の方て規模するてさつと重むす
る所の三藏と云ふ位ふるた故小世小此僧の事と三藏
法師とつめてゴザルふんと夫程其人佛信心て識小嶮岨
艱難千辛万苦いふ小いる其程の難儀とて天竺と云
いて佛法を受て来てそして飽きて佛蠱負といひ其佛の
本國の事や小依てさうも善く云ひたくてあらふた
らふがさうもさういふ云とぬ思ふ國にや小依て在りの
儘小書たと見へるでゴザル依て彼の國うらの事を見る小
是程性うふ物いふ小依て其西域記小玄奘の書て置
てあらまるといひつまんて申すのでゴザルまが天竺の異
名と身毒とも又印度とも云ふ印度と云ふハ天竺の詞で

ハ月の事で彼の國の國形は北ハ廣く南の狭くてさう
と半月の形してある小よりて國の名を印度といつたも
のてゴザル西洋の人ハインデヤ又インシア又インナイ
ンと云ふ俱小言の轉訛つたのでゴザル扱右の如く月の
形してあるとつふの心を以て漢土でハ彼の國をさうい
月氏國とも云ふでゴザル

西域記の一説小曰く印度者言諸群云々故謂印度とい
つるハ後人のいひ出たる説小て信する小足らず本文
小取とる説と正とすべし
扱漢土とよりハ又一ハ廣い國で東西南北といふ丈
子又細ら小分つてある采覽異言小引く万国傳信記事小

云々西ハヘルシヤ小界北ハ韃靼小連リ東ハ支那小至
リ南ハ印度海小臨メリトゴザル其風土の事ハ阿蘭陀の
方下悉しく考へ能々見極めた天文地理の説小依て見ろ
と天の度数下ちやうと赤道線と云て日輪の待通りある
る道小近く已小彼の國近くの島々小ハ赤道の直下小
あたる島々と有る程の事故大の熱國でゴザル夫故米穀
一年小三四度とみのる草木と四時いつと云ふことと
花も咲たり實もあつたりす夫故西洋人ハ此國を天の
下の花園と云ふことと採覽異言小見へてある又沈
香や丁香胡椒杯の類ハ香氣の高いもの出來ると云ふ
と熱國故のことと下ゴザル人間と殊の外下品で熱國故國人

は皆黄黒く云バ土氣色の最と惡ろい色さしゴザると云ふ
ことと下ゴザル西域記ハ天竺の一国ハの風俗を記す度小顔
色厚黒と云ふ事ハ幾所とも云ふ云て有るハ此事でゴザル
又採覽異言ハ土人の色或ハ黄ある有り或ハ黒き有り
と云て有る既ハらんぼの國と云ふハ此國內ハ則釋迦
の生國迦毘羅衛國の西南の界小ある國下彼の崑崙と云
ふ國ハ夫下ゴザル天竺人の黒き中ハ此崑崙國の人ハ別
して黒い小依て西洋人の総て色の黒い人をコレロ
ンボと云ふ下ゴザル御國小於てコレロンボと云ふことハ此言の
うつり下ゴザル釋迦の生國ハ此隣にヤ小依て其黒きこと
ハ同トことと下ゴザル熱國故皆黒いの下ゴザル又西域記ハ

時持暑熱地多泉湿と云て有る如く兎角暑熱の烈き國ハ
湿氣も亦強いもので夏物もさび生るべし知事るごと暑
熱の氣も蒸出して色々と思ひ虫獸も多く思ひ病も有る扱
家の住居方杯も上下あまり隔ふいら兎角さびむさいこ
と、とが多い其中小変ふことをするのハ地小牛の糞を
塗て夫を清淨たと云たもので其是を塗る心ハ牛の糞ハ
日小照付らるゝとふと嗅てハ麝香の様小匂ふららの事
と見へるでゴサル又時々花を取てまき散すことと有る
衣服ハ裁製シヤスとせず深めもせず白いをとりと云て横巾の
儘右の肩と祖カマいで居る又女ハ衣を襟カマひて下へ垂して足
ハ肩男ハ腰をも隠して居る髪ハ中で結て余りをハ垂下し國王

や大臣杯ハ首小華髪とハ小物を被り又賢冠とハ小物も
うしろ則觀音杯のうしろで居る物もそとでゴサル身小纓
絡小環や孔雀の尾杯を付るもありはれとも王家の次小
杯ハ婆羅門杯ハ小家柄の者杯ハ死人の志や秋うらべ
を纓絡の飾も有り者も多し有るとハ小こととゴサル又耳
杯ハ一穴を明りて環を掛る達磨杯の耳の環もそとで居
又悉くの人ハ徒跣である履をばいて穿る者ハこんと
ふいと云ふこととゴサル如何ハ諸の佛小履をけりて居
るのハ見たこととありてゴサル又うらたハ旃檀や鬱金
の類ハ諸の香を塗ることとゴサルあせそらするところハ小
湿熱が強く蒸るうら自然と彼の國人ハうらたハ嗅い

うらのことゴザル又髪の縮んでをるの熟國故おのづ
ら縮むのゴザル又釋迦の生國迦毘羅衛國といふ印度
小有る一つの島國で廻りやうく三百六十余里希國の七里余と
いふらとでゴザル是をセイランといふでゴザル増譯采覽異
言小此島を去赤道北方四度とあるうら別して焼るやう
でゴザル則釋迦の修行したる靈鷲山といふ山に有る古跡
と存してあるうらゴザル此國の道順の風俗を采覽異
言小依て見せば玄奘法師が渡つたる時分といふ余程風俗
と移つて男子ハ上身赤持圍絲布手中加以厭腰鬚鬚並滿
身毫毛皆剃止留具髮用白布纏首女人髮縮腦後不圍白布
其新生小兒則剃頭女則腦後不剃云云若欲人喫飯則於圍

所潛食不令人見あるうら大厚小風俗といはつて
ゴザル又面白いことと有る此國人が瘦しては溺してと
其あう下前陰と肛門と是非濯ふと云ふこと西域記小有
りますう是ハ今以て其風俗を遺つて居て釋迦の出生し
たる迦毘羅衛國といふ小其子孫と皆亡びて今ハ彼の崑
崙程の處と共小阿蘭陀小せしめられ佛法と大半亡び
て切支丹宗小成りしつたる故長崎へ來る阿蘭陀人
台仕ひといつと彼のうらんぼを連きて來るるせふは
人におろしう極骨を削りしつ働く故にヤといふこと
下ゴザル其阿蘭陀人の連きて來るうらんぼめ今以て
昔の通り大小便の後で矢張尻や前陰を洗ひ居るふは小

つらてをうい吐がある。先年来たららんはめおの
か子僧らんほを連て来たらめ下ゴザル所が二三年し長
崎小庵らんち小其子僧。兎角皇國人の真似をするらん
で其親らん人ほら叱つて云ふことよ。おのせ、其桶小
日本人の真似と。おろ後小、尻も洗ひをるまいとい
つたと。よ小こととて。是は成程一言と。おいこととて。ゴザル
扱甚洗小番。壺の様小揃ひて提けて歩ろく。是を彼らん
んほら國へ歸る時小棄て行くさう。おろ何ら形のらん人
物故好事不算。捨つて庭へて置いたり。彼是年を経る
うち小江戸の茶人ふとの手小渡り江戸の人。らん人ふ物
と。つらと知す其形小ほ出て自慢と。貯一床、直して花

生小してあつたことを見たる。と。森羅万像。紅毛雜話
小書て置たら。いさ。是は。い。や。ふ。ら。と。下。ゴザル。扱。又。天竺
人の煩ひ。ついで。も。國風。十。七。日。間。と。云。ふ。もの。粒。と。絶
て。め。其。内。ふ。る。白。世。い。よ。あ。け。ら。ぬ。と。そ。う。下。薬。を。飲。ま
せ。る。又。死。人。の。葬。り。う。た。い。三。つ。の。け。け。が。有。る。第一。が。大。葬
是。は。皇。國。で。も。持。統。天。皇。の。御。代。小。道。昭。と。い。ふ。僧。が。彼。の。國
の。法。を。真。似。て。仕。始。め。た。こと。と。今。も。為。る。通。り。又。一。つ。の。水
葬。と。云。つ。て。流。川。へ。う。ち。や。り。次。が。野。葬。と。云。つ。て。林。へ。棄
て。獸。小。飼。せ。て。仕。ま。ふ。下。ゴザル。又。さ。つ。く。年。不。寄。て。煩。ひ。つ。ま
は。今。度。い。よ。く。ある。まい。當。人。と。思。ひ。人。と。さ。り。愚。子。様
ふ。ある。と。親。故。也。知。友。不。寄。り。集。て。樂。と。奏。して。錢。と。して。其

上。下舟一載て海川、流し出すと中流ありて其人不自ら
ら溺せり死す。まふでゴザル。ううすは天一生ずると心
得て居ると云ふこと下ゴザル。扱らして玄奘法師の西域記
小記して有る風俗の意より下ゴザル。但し右申すやうな風
俗ども、経て下國の風俗て又ハ仕方ハない。中ノ性
うらぬことハ觀經といふ佛經小依て考へたる所ハ釋迦
の時分まふ小玉ふして父を害する者一万八千人又子と
して父を殺すもの一万人とも記して有る。是ハ依て天竺
の國柄を知らうといふでゴザル。むうやうに乱りういふうら
ま譯ハ何事（始知の事）ハ乱りて有つうらうのここと下ゴザル。夫ハ先彼國
國の人物小四つの差別が有ることをまふ心得小やあり

まふ人ハ夫ハ丁度うらうの詞で摩ハハ士農工商といふ
様ふりけて下ゴザル。先第一を刹帝利といふ。是ハ代々王と成
る。つぎ家柄で則五天竺七千余國の國々の王と成て居る
下ゴザル。第二を婆羅門といふ。是ハ翻譯して云ハ淨行と
云ふこと下則淨行と書く詞で國うら相應小有來つた學
問下して段々家を傳へるもの下ゴザル。第三を毗舍と云
ふ。是ハ商人下ゴザル。第四を首陀といふ。是ハ農業の事を為
る者下いほ下百姓下ゴザル。刹帝利婆羅門毗舍首陀之を天
竺の四姓といふ。まふ此四つをよく心得て居るつぎこと
下ゴザル。
扱此刹帝利と云つて王と成へる家柄の起つた所以ハ長

阿含經といふ小彼の國の古傳が毒々記し有りまはす夫
小依て其荒まを云い世の初め天地の成ふとす
時小大水彌満たる所が風が吹て夫を結搗て扱此世界が
出來ると化生と云つて人を出のてく様ふたは、生し
て其砌ハ身が光が有て飛行自在下男女の形も備わらず
又尊卑親疎の差別も無く又其食ハ歡喜為食と有つて嬉
しい悦ははしいと云ふことを食として居つたとすこ
と下ゴガレ是が変ることて兎角佛經ハ、らんふをうり
ことお有りまはすかどあし、歡喜を食つたもの、彼の糞
といふ獸が糞と食ふと同しことハゴガレ
扱斯の如く元一所ふらやくと虫の涌くやう小衆共小生

十たろとの故衆生といふと有りまはす是は抑も衆人を廣
く衆生といふ佛語の出所下ゴガレ扱右の如く此衆生共が
おきんまはしおうづあし歡喜となへてをつた所が自然
と地より密のやうな物う涌出たて是を地味と云ふて是
そら下彼衆生共が以手試嘗とあるうら氣味まらるるうら
小ちよいと拵とつけて嘗めて見たこと、見つてすうや
つて見ると味甜く今まで歡喜を食て居たとはいひついで相
違ふことてさかとうまくてたまらんうらら、で彼の衆
生共が元素蛆のやう小涌たる者共故蛆のやうふたうう
て頬つ、らんて嘗るとあり手でやくつて嘗めると有
り、因有勝負便相是非と有うら犬さふ争ひら出來てイヤ

お・此の一口嘗める中におおのハニしやくり嘗めやつた
杯と云めて犬の群聚してある所、汁の余りでも棄たや
う小嚼合ひるとし致したると、見つるでゴカ板あり、小
悲しき事、右の物をしやくつてこのろた各々身の光り
もふくふり飛行自在と止み其上意地をきたるく多く志
やふつたやう程顔色塵悴たと云ふこと下でゴカ彼是する
中お彼の密の様あるのを皆消て無まつてしまつたで
爰お於て皆懊悩咄哉と有るうう大きふ力を落して泣き
めいたると、見るとでゴカ是ハむとあること下でゴカ此後
小赤地皮と云ふもの又地膚と云ふものも生れ下で又と
右の如く争ふて取食ふたと云ふこととありまする其事

お・まのわいて其二種の物も亦滅つてしまふと後小自然
と稗米が生じたといふ事下でゴカ是ニて衆生は大き小悦
み之を食つたる所、此時始て男女の形をとりて陰茎陰
門が出来たといふ事下でゴカそこ下互小相瞻視遂生總想
共在屏處為不淨行と有るうう衆生各々互小前と出して
見せし見と致してみしやもその御もたくらへ
性しき一物を突出してゴカといふおちうと亦先の股
くらとのまを見してう仰せらる、其祥の股くらへハ奇
しき一ツの洞ら出来てゴカいふ小拙者が此突出したる
一物とそこの股ある洞空ハさしふたふ試たくらを候へ
いらふとまぐ、云て在屏處為不淨行と有る通り皆お見

え、ね所へ行てるめ上総の方言小所謂ソ、コメグしたる
こと、見えるでゴカルら迷ふ天竺小於て男女交合の始め
でゴカル扱う様有りつゝ、其衆生共此淫佚の事小の心
と寄て夫婦とふり其行ひの時小人小見らるるや、と為小
始て屋舎と立たとつふことでゴカル則本書小因此因縁世
中立家と有るでゴカル又是より始て懐胎して子の生じる
事小始つたとつふことでゴカル扱彼の自然小生したる所
の糞米ハ始の程ハ朝小刈せハ暮小熟ハ暮刈せハ朝小熟
するといつふやうふ有たる所うち小大さ小慾つらのひつ
はつたる衆生が有て四五日程の糧を一時小刈取たる所
あらんと其糞米が生るくみつてしつたでゴカルそこへ

ちのこみうんうら各土地を分ちつて疆を立て田を作
るとつふこと始つたでゴカル所を中小不届な奴ら有て
己が米をハ藏めて他の田穀を盗らるとしするは社とし
彼の畑の涌やうほとろく一処小主たる衆生のこと故
皆同輩で誰有て是を法断する者無いつら各々評議し
て中小一人勝れし形も大きく威徳の有者らあつたる故
ちれを主小請て善をある者と賞し悪をある者を罰し、
せたる處が是で先づ乱かりし事しうするいたとて子
ことでゴカル之を刹帝利と云ふ刹帝利と云ふ民主といふ
の心て是が天竺小於て酋長の始て彼の天竺四姓の第一
たる刹帝利家の元祖で是より段々小子孫がふえて扱天

竺の國々の南長世ハ皆此末ニヤト云ふこと下ヨサハ 釋迦
法師ト即チ此刹帝利ノ子孫ト迦毘羅衛國の淨飯王ト云
ふ子下ヨサハ 叔釋迦の姓ハ五つの譯ヲ有る一ツハ瞿
曇氏ト云ふ二ツハ其蘇氏ト云ふ三ツハ日種氏ト云ふ四ツ
ハ舎夷氏ト云ふ五ツハ釋迦氏ト云ふ悉ク是ハ分の有るけ
どトモ余リクダクハ依テ是ハ措キテウウ^其中其蘇
氏ト云譯ハ彼の刹帝利の子孫トウウ^其年^其代ト累
ねていつち後の王ト大茅草トウウ^其夫ハ老衰ト
テ子ガ無ツた故國の事トハ大臣トシ^其一ツハ百者ト任セ
テ自ら剃髮トテ出家をア^其た^其此ハ極老ノこと故歩
行ガ有^其ル^其ぬ^其そ^其ラ^其弟^其子^其ノ^其輩^其ガ^其時^其々^其出^其テ^其ハ^其乞^其食^其ト^其シ^其テ^其こ

此ハ食^其ヲ^其置^其其^其乞^其食^其ト^其出^其ル^其時^其ハ^其虎^其狼^其ノ^其害^其ト^其恐^其シ^其テ^其彼^其ノ
王^其仙^其ト^其ハ^其草^其籠^其ト^其入^其出^其テ^其樹^其ノ^其枝^其ト^其取^其ツ^其ケ^其テ^其出^其タ^其ト^其云
ふこと下ヨサハ 所ガ彼の白い物ト着テ居ル國トウウ^其釋^其師
ガ^其あ^其つ^其テ^其遠^其ク^其ウ^其ウ^其ト^其見^其テ^其白^其鳥^其ト^其有^其ル^其ト^其思^其フ^其テ^其之^其ト
射^其殺^其シ^其タ^其ト^其ウ^其フ^其こと下ヨサハ 其血ガ地ハ漑ツテ石
トウウ^其後^其ハ^其甘^其蔗^其ト^其ニ^其存^其生^其ト^其ナ^其ト^其ウ^其ウ^其ト^其下^其ヨサハ 其
其甘^其蔗^其ヲ^其た^其ん^其く^其日^其ハ^其照^其サ^其レ^其テ^其割^其レ^其テ^其一^其本^其ノ^其中^其ラ^其男^其ノ
子^其ハ^其生^其一^其本^其ヲ^其ウ^其ハ^其女^其ノ^其子^其ハ^其生^其出^其タ^其ト^其ウ^其フ^其こと下^其ヨサハ 其
ラ^其下^其彼^其國^其ハ^其居^其ル^其目^其下^其ト^其シ^其テ^其聞^其傳^其ツ^其テ^其其^其男^其ト^其女^其ノ^其子^其ト^其逆
一^其取^其テ^其コ^其リ^其ヤ^其王^其ノ^其種^其カ^其ト^其ウ^其ツ^其テ^其養^其育^其シ^其テ^其成^其長^其ノ^其上^其下^其遂
ト^其立^其テ^其王^其ト^其ナ^其ラ^其ト^其下^其ヨサハ 其故ハ甘^其蔗^其氏^其ト^其云^其ふ^其ト^其又^其釋

迦氏と云ふ譯ハ此甘蔗王の生きたと云ふ王五人の子
に有て其中一人ハ本妻の生きた子下是ハ不器量との下
有た残り四人ハ妾腹の子下何れも器量者なる所ハ本妻
の所執と嫉^ミしく思つて右妾腹の四人を讒言^シて雪山
と云ふ山の邊へ擲出^シたてユカレ所ハ此四人の子共ハ器
量者^ナありたる故ハ遠くの人より下歸服して数年の間ハ
家居と立續けて一々國を治りた下ユカレる下父の王が
大^キ小^ナ歎息して吾子共等ハ釋迦^ニヤといつたと云ふこと
下ユカレ釋迦氏と云ふハ是^レの^レ下ユカレ^ル釈迦と云
ふ天竺語と翻譯す^ルハ能仁といふ言とる^ル下能仁と云
ふハ仁と能^スると書た文字でい^ハる^ル我子等ハ仁者^ニヤ

と云つたもの下ユカレ^ル釈迦此甘蔗王の五人の子供の第五人
目と尼拘羅と云ふ尼拘羅の子と俱盧と云ふ俱盧の子と瞿
俱盧と云ふ瞿俱盧の子と師子頰と云ふ師子頰の子と四
人有つて其第一の子と首圖那耶と云ふ是と翻譯す^ルハ
淨飯と云ふ^ルと云ふ淨飯と云ふ淨飯と云ふ^ル下加
う名と付た^ル釋迦^ハ有^ルハ^レハ^レ是^レハ^レま^ハつ^ル下志^ス
せう^ハ釈迦淨飯ハ善覺長者といふ者の娘摩耶と云ふ婦人
と娶^リて生きた子と悉陀と云ふ是^レハ^レ彼の始^メて佛道と云ふ
事と考へ出して世ハ弘めた釋迦といふハ此悉陀が^ルこと
下ユカレ^ル釈迦といふ^ルハ^レ本^ノよ^クの^レ名^ニて^ハい^ハる^ル元來^ハ姓
下^ハ先^ニも^ハ申^ス如^ク能仁といふ^ルと^ハ能仁といふ^ル仁者

と。ワシ程のこと下ユサレ夫のこゝろを多々衆生の為言
と云て苦んで佛法と弘めたに依て其徳を賞て釋迦と
言たと云ふこと下ユサレ何れは釋迦と云ふは曠の名で
なく姓ありあたる名あり下ユサレ扱此者の生る、時小母の
右の脇より生れ出て生れると直小つらう七足歩いて
右手と擧て天を指し左手を下て地と指し師子吼と云
はとつここと下ユサレ此師子吼とつこ何の事と云く産
聲のこと見つる下ユサレ然ると又此師子吼下文句を付
て我於一切天人之中最尊最勝無量生死於今盡矣此生利
益一切天人と吼たともあり又一説小天上天下唯我獨
尊と吼たとも有る下ユサレ此生る、と直小歩いて手と指

上たり何れとて吼た事は何の経ふと云て有るにう曠小
らん五事有た、と知世にせんあせと云ふ小此奴邪る
る道と始めて夫と云く世小説弘めたる程の度る奴改其
生れり時と此位の度ハ有りうふあとの下ユサレ又真虫と
見たやう小脇より生れたと云ふ事と見ハ心狭く儒者杯
ハ譯とも正さずめつた小やうと云て疑ひませうか
古學の廣い心より見れば此と有まい事でも有いら矣
張偽でユサレあせうやう小偽ハつたものじやとつ小釋
迦程の佛が凡人と同一様小陰門と云ふ不浄を所より生
出たと云てハ尊く思ハせぬうら脇腹より生れたと事と
神妙小せんう為小偽いつたこと下ユサレ已小經文やと摩

那う胎ふやとらん とする前ふ陰門ハ不浄ある所じやふ
依て脇うら生じやうと親しく託胎したと云て有るて是
右中す通り変物の生れたる事故う様ある変の有る生いで
とふり此ふも右の釋も有り此の外ふも諸の佛經ふ尻口
の合ぬ嘘をうりつりて有るふ依て誠の事でも實とい思
はれぬ下コサレ是ハ丁度今の俗でも兎角何ふらうす間ふ
あひのうそちちくわと云て有るく人う偶も實の事と云
ても又嘘と思ひて信用のありぬやうふためてコサレ
是ふつりても偽ハ云ぬやうふ教いたいもの下コサレ不断
嘘をつく人とつり者ハ何と云ても人ハ誠ふせず何う云
出すと又鉄炮うまんはちふと云て取上ぬうら後々ふハ

自分らうして嘘つきの心持ふ成て居ると見へて何そ一
言ひ出すふも是むつりハ實の事じやと先づ前口上を
云て言ふやうふあるもの下コサレ又其うぶ聲ふ天上天下
唯我獨尊と云つたの或ハ我於一切天人之中最尊最勝云
云と云つた杯といふも增釋迦が成道出山して道を弘む
る時ふ妄言したる説の尾と結んる為ふ後の出家共の
偽り云つたること下コサレ是ハ追々聞るうちふ其他の
皮の顯出せざること下コサレ
扱此生出たる日ハ因果經ふハ四月八日じやとあります
が佛所行讚經と云ふふ三月八日とつふこと下コサレ時ふ
白淨王及諸釋子未識三寶即將太子徂諸大寺と有るハ則

梵天の祠小者請したること所謂宮系りと見らる下コヤル
是ハ釋迦の言ひ出さぬ前ハ佛といふ者ハ毎々その故誰
と知たる者多く其第一と祭る所ハ古傳のまじく梵天と
大切小したる故下コヤル

此續きの文小此時其梵天の像を座より立て釋迦小僧
が足を礼して淨飯王小いふ小此太子ハ天人中の尊
下虚空大神と皆悉く敬礼すいふ今こゝ小未て我
と拜さするそといひたと有る例の偽下コヤル

扱其呼名を諸の娑羅門共小相談して薩婆悉達と名け
た下コヤル

是ハ漢語小譯して吉祥といふ事小ある下コヤル

扱此悉達の人相を阿私陀仙人と云ふ小見て此子乞食の
相あり必ず出家して大名を祭すといふと云たといふこと
下コヤルそこ淨飯王が大方小愁て出家させしむる為小
くさ其用意として中も多くの妓女の形容端正不肥
不瘦不長不短不白不黒才能巧妙各々教技を盡たると擇
て身小ハ名寶の璣珞と飾りうけりもをせ悉達ハ心
目と悦びせんといはうたといふこと下コヤル扱この摩耶
ハ悉達と生て七日目小死んだ下コヤル脇から生れたと云
ふハ偽りあること何と云へば以の外の難産であると云ふ
もの小ハ生後七日其母便覺福應昇天非菩薩答前露那摩
觀摩耶大命將終有十月七日之期故神來下是菩薩權方

便ふと云つて有ふ銘て釋迦の妄言の尻を結りよらて作
つた説下コサ銘て此の大善権經よりものハるやうの
尻と結ふ事斗りと多く云つたもの下コサるくして淨飯王
の後妻と入秋て之が名を摩訶波闍波堤とつた是れも子
が出来て難陀とつたコサハ 叔志達が七歳の時婆羅門と
師とて手と習す時ふ其の師は梵字四十九字の手本と
書りて其の音と教へたる所を悉達が聞ふ此国土の
中小書な幾種ある不又此阿字小何等の義があるかと問
ふ小々こつて其の師は答へ不出来ぬ時ふ悉達がつたふハ
銘て此国土の中小梵書あり又供禮書とつたが有る蓮花
書とつたふあり銘て六十四種有り又阿字ハ之梵音聲ふ

りて字義は無上正真道の義の有ると云つて細らふ其の事
を論し聞きた下師匠の波羅門とつたみ果たは有る又諸
技藝典籍議論天文地理算教射御悉く自然不知て居たと
あるが是れもつて偽りて此をりつたは今もは有る夫秋ハ
此續きの事實と見ると悉達が付く徒ふ者共と國界へ出
て濶浮樹と云ふ木の下小イテ耕人と見て居たる時小夷
か一つ死て居てそれと鳥が啄て為る所と見て悉達も悉
悲の心を起して衆生可憐互相吞食するらとらと思唯し
て之を此破界らつた稍も菩提心をさしつけたとある此
後又野外へ出たる所が一人の老人が頭白く背偻り羸さ
らばつて杖ふすつたて歩み行くを見て側の者小あ秋ハ

何れやと問ふに徒者あり然れ老人と云ふ者でユルと
いつた所が老と云ふはふたふたの事と云ふ徒者
若くは老と云ふは年つめて色衰一飲食と喊し氣力と薄
くあり餘命幾干とあるものを老人といひますると云つ
たはれは夫れ彼れ一人の事さうの又一切の人皆さうのと
問ふ一切の人皆悉くそのやうな事ありまするといふと悉
達は大きに嘆いて爰に又復思ふは十年移り老の至ると
と電の如く吾雖富貴豈獨免耶といふて世の人を此理
を怖まぬことと云ふことと云て益し世を厭ふ志も起て愁
ひつゝ歸つたことと云ふは是れ十七歳の時でユル
此後又途に於て甚だ弱りてた病人と見て此時に彼れ

何れと徒者も問ふた所はあれ病人でユルと云ふ其病
と云ふはさうの事と云ふは問ふ病と云ふはさうの事
やうくの譯で起るといふことを言ひ聞きたでユル所
夫れあの者はさうの事と云ふ人皆さうの事と云ふ一切の人誰
とては是れ進出うたいらふでユルと答へたは悉達
又みだりに出してさうの怖ろしきことのあるは世の
人ハこれと恐るぬことと云ふと怖ろしく思つて身心戦
動如月影現波浪水と有るは地震の子ら蕩蕩の幽霊と
やうな事と云ふは振い出したは見へる事と云ふは是
等の説としは釋迦の菩提心を發したる所以と有るはま
記したるは是れ實にさうの事と云ふは世を揺る

志が起つた下あつた下ユカニ是小つけて思へ右申した
る七歳の時書を學んでいろくこまやく秋ふことを言
つたり又諸技藝典籍天文地理算教射御を始め何小ら
す自然小知て居たると有るのハ皆後うらいつた偽り
ある事ゆゑの皮ふ知れ下ユカニあせとつた小六口七口で
夫程の事を精密小辨へ知てあつた程の者十六七歳少し
成つて人小病とつふことあり又老るとつたこと
有る譯を知らぬとつたことふとふと有ませうを能考
へて見るがよひ下ユカニ又右らの虫や老人又病人をハ
釋迦が野外小出たる時四くりみるく見て右の如く無常を
觀した如く見ゆる夫と又迷り言として其虫と老人と病

人も悉達小菩提心を護させんを為小淨居天といふ天神
かろん不者小化て見せたのこやと有ますは是ハ殊小居
の結りうぬうそ下ユカニあせとつた小釋迦ハ元來却率天
小居て成佛して居た所を此天竺へ生きた來たのハ仮り
小摩耶夫人が腹とつりて生れたとつたハあいらそん
あり出家するこつたハ豫て覺悟して居ると故淨居天を
色ハ工夫をつけ小菩提心を勧めすとよいこと下ユカニ
殊小ハ天うら下つて摩耶が胎小宿る時諸の天神小豫て
其事をいつて聞かしてあるとつたハこやあいら是尋ハ何
の事とふく釋迦が元來凡人である所とらんふ事いら思
ひ付いて出家したと有の儘小傳へてハ面白く尊

くもあいやうじやふちつて、やうふ鹿口の舎ぬ偽とい
つたもの下ユサに総て佛經ぶしハ此次の舎小委くつひし
せうふ盡く釋迦う死て途後の世小嘘ハつり次第と記し
たるもの故實の事ハ無いが其中ハ實小有たる事實うま
し文つて有る又ハよく前後と考へて味ハへると
動うぬもの下ユサハ其動うぬ實事を撰ひ取て文を規矩と
して能く探り考へるとその偽ぶしふよく知せりてユサ
総て佛經と讀むの法ハ一口二口の實事と以て偽説と考
へ知り又其の偽説と以て實事と知るとし法を心小立て
讀う更い下ユサハさうふいと惑さるゝことでユサ
扱悉達ハ己う居所小歸つて七右等の事のことハ心小懸り

快々として愁悶つて居たる所ハ父の淨飯が其の徒者共
小上件の事共を尋問て悉達う遁世心の萌あるうとを察
り彼の阿私陀仙人が前小相と見ていつたる言とあり
た、其出家せんことと恐れて悉達ハ此時七早十七歳
小と成つたる事故妻と持して其心を止させんとう
都合三人と呼て授け又選諸妓女、聰明智慧、顔容端正、善於
於歌舞、能惑人者、種々莊飾、光麗悦目としある下ユサ扱志
多う妻三人のうち第一と瞿夷と云て水光長者といふ者
の女下ユサ第二ハ耶輸と申て移施長者といふ者の女下
ユサ第三ハ鹿野と申て釋長者といふ者の女下ユサ又子
と三人有た下ユサ第一と善星といふ是、鹿野といふ女

の生んだ子でユサン第二と優婆摩耶といふ瞿表といふか
生んだ子でユサン第三と羅睺羅といふ是ハ邪輪といふか
生んだ子で彼の五百羅漢の其の一人でユサンと妻と
三人持て子と三人生せりや随分澤山ふこと下子福者と
云つてもよい程のこと下ユサン但し是ハ佛本行經五夢經
十二遊經ふといふ類ひの慥るる佛經小記し有て争きぬ
りと下ユサン抑も釋迦小妻子の有る所以ハ右申す通り天
竺の四姓のうち彼の第一たる刹帝利ハ王種と云つて國
と守り民と治むる者其次小立つ婆羅門ハ法種と云つて
民と導り教ふる者下漢土の國でいはずらハ儒者の様
ふ者でユサン天故此婆羅門といふ者ハ妻子の有る者下元

釋迦ハ刹帝利の家小生れハ致したるれと自分物す
りて王と成す世五の時小家と出て婆羅門と同しやう
小人と導り教一釋迦以前小類と無きたことの新趣向と
立て妻を持ぬといふ事を始めたものでユサン叔やうの
法を立てたものとわけが有るが夫とハおつけ申す下ユサン
此譯故小其の出家せぬ前ハ妻とて小妻と持た小依てま
くけむを致しまぐけむを致し小依て子と生せたと云
ふものでユサン夫れを後世の佛者共るる具足を致す僻
心小釋迦小妻子が然りしやう小澤山有たとし小事ハ
いやであらぬしう後ハ偽り作つた佛經小いし小負情ミ
多事と言つたものでユサン一作諸ろの佛經と皆釋迦の説

た事を記したもののジヤと思つて世々の所より執共盡く
後の出家共の釋迦小託けて偽り作つた物小相違るく其
の譯ハ具さふ此小舎小中才積りてユサ
扱共の後世小偽り作つた佛經の負をーみとつ小ハ譬ハ
瞿夷クイの女メの事と耶輸ヤが別名トヤと云つたり是ハ一
人ト妻を少るくしよと思つての負情ミ又ハ善星ト云
ふ子をバ釋迦の子てハふい堂弟の難陀が子トヤ杯と云
ふ有るハ執ト皆せりなく作つた説どもで真の事であ
りや致さん殊小善星杯ハの子涅槃經の文小依て考た所
ハ釋迦の菩薩の時の子トヤと有るハさす執ハ廿五で
出家して山小入り三十の時已小佛小成たと云て山を出

ていふ後小鹿野とつ小女を祀ハ生きた子小ハ相違あり
下ユサさす執ハ菩薩ト油断ハるハ所ハ是と云ひらる
めふふとてまづ大善権經とつ小云つて有る小ハ何故
菩薩而有室娶菩薩無欲所以示現妻息防人懷疑菩薩非男
斯黃門耳故納瞿夷釋氏之女生羅云ハ天夜没化生不由父
母合會而育とありますハ此經文の意ハまづ仮ハ何ハ故
不菩薩ハて妻を娶たとのジヤとつハの問ハの辭を設
て扱ハ小答つて菩薩ハ無欲と云つて房事の念ふとハ無
り執共其妻子と持て示現せたる所以ハ若しヤ人ハ菩薩
ハアリヤ男ハ有るハいハ云ハ又ハ黃門と云て陰
莖ハのうたえ者ハヤと思ハ執ハうハ其疑を避ハふハ

為小瞿夷とつゝ女又釋氏の女るとを納きて妻とあり羅
云と生れたるがやが夫と天より度没とつて胎と投して
せ生じたため下父母の交會に依て出来たものであり
と云ふの意でござん然しとし交會して出来たや無りや
釋迦ハ黃門と云て陰莖を以てハ無りつたと云ふの證如
ふハ多うぬくと云ハゴリヤ性しうらぐ尻口の合ぬ貞
惜いでござ又或ハ耶輸が腹をちよいと指さしたれば妊
んハ六年の間生れず居て釋迦の成道出山して後小羅
睺羅が生れぬと云ふ事と有るは釈共外ハ又後婆摩耶とつゝ子
人ハ丈夫としてやうなり釈共外ハ又後婆摩耶とつゝ子
と善星とつゝ子と二人有るは此二人の子共とハ何と

云ひくろめよふ無ひでコヤンコリヤ皆俗ふら小頭隠し
て尻をくさずとつゝ類ハの嘘で頼と釋迦の知らぬ事
下ハあり釈とし余りといハ智慧の無い嘘のつぎよ
ふハコヤンと云ふやうなせりふい嘘をばくとつゝ小一
伴釋迦ハ人を導くめ方便小我ハ久劫とつて幾百萬歳
とつゝ限も無く久しき前より成佛して却摩天とつゝ天
上小居たりが世小出て佛法を弘めたりと云ふ時節と云
觀極めて淨飯王ハ妻摩耶夫人の腹小宿つて世小出たり
のゴヤとつて人を感し置たり其後其流しを汲む佛
佛者共の心小若し人小釋迦ハ左程も久しき先より成
佛して居たりと云ふありハ妻子ハ有りそしふいもの心ヤ

佛小妻子が有しハすゞぬと難しう故に時小困る釋故釋
迦の方便小りつた事の其の尻を結ぶとてうらる類ひ
のせつふい嘘をついたもゆでユル又後此余の佛經共小
も右の尻を結ぶらんて實小く一出して申すも申さ
せぬをうい事ハより布ります其内一つを云ふら
ハ觀佛三昧經と云ふ經文小有る趣ハ釋迦ハ妻を娶つた
る釈とし交合をせあんた所が耶輸陀羅を始め諸ろの侍
女共ハいふに控し人で居たる時小其の侍女の中小一人
不云ふ小ハ奉事歷年不見其根況有世事と云ふ
但しらハ小根とつたなるハ則陰莖の事と云ふハ頓て交
合のころでコヤン何の事と云く釋迦小仕へて年を経た事

釈共其陰莖を見たこと無いらまゝに交合ハせぬは
づがと云つたのでコヤン
時小又一人の女が小ハ我事太子經十八年未見太子
有便利患况彼諸餘と云ふ此意ハ我太子小事へて十八年
を経たり釈共是より太子の大小便といた所を見た事ハ
無いらと云ふことハ陰莖と無いと見ゆらゆて交合ハ
るら小不とりハ其の時諸ろの女共ハ皆々うらハ太子
ハ男下ハあるまいと思ふたと云ふ釋迦ハ是を察し
晝寝をして被の一物を出して見せたでコヤン其見せたる
趣をバ經文の儘小讀ますらうらつらと云ふに佛憐れ直下
コヤン爾時太子於其根處出白蓮華其色紅白上下二三華相

連諸女見已後相謂言如此神人有蓮華相此人云何心有凍
著作此語已噫不能言是時蓮中忽有身根如童子形諸女見
已更相謂言太子今者現奇特事忽有身根如大夫形諸女見
已更不勝喜悅現此相時羅睺羅母見彼身根華々相次如天
劫貝一一華上乃有無數大身菩薩手執白華圍繞身根現已
還沒爾時復有諸姪女等皆言瞿曇は無根人佛聞此語如馬
王相漸々出現初出之時猶如八歲童子身根漸々長大如少
年形諸女見已皆悉歡喜時漸長大如蓮華幢一一層間有百
億蓮華一一蓮華有百億寶色一一色中有百億化佛一一化
佛有百億菩薩無量大衆以為侍者時諸化佛異口同音毀諸
女人惡欲而說偈言

若有諸男子 年皆十五六 威壯多力勢 數滿恒河沙
持以供給女 不滿須臾意
時諸女人聞此語已心懷慚愧懊惱躡地舉手拍頭而嗚呼惡
怨各厭女身皆發菩提心と有りますと是ハ大変ふ
らと云ハ有りませんらと云ハ皆右申す通り後の法師共
負惜んで作つたる馬鹿説でコナルやらの馬鹿説を使て
釋迦をふふ積り下ハ女々ふり此共是らそ真小具原の
ひ子倒しと云ハもの下コナルと云ハもの下ハいふら坊
ふヤと云つて文有る者ハ有りもの下ハいふら坊
まのやうふたハグタグタと云ハハ讀下所ハたまた
うハ今篤胤が讀だ様ふらんと讀人ト有るうらさう

讀むんハたまらず右申す通り諸ろの佛經盡く釋迦ハ託
し後の佛者の偽り作つた物ハ有るハ此世の儒者
あると大方の人ハ皆實ハ釋迦の口より出て阿難の書
置た物じゃと固く覺えて居るハ依て目指てハ釋迦と謗
る世ハ佛道と謗る者ハ皆さうト云はれ方のやうハ佛經
ハ皆後の佛者の偽り説て釋迦の云ハれ説共ハ十カ
九分はとじゃとつ説と心得て其論辯ヲ收るやうハ事
ハ有て論辯するとしやうハ分を立て云ふ人ハ佛法を
謗る人ハ譬ハハ百人有るやうハ其才ハ能くするハの釋
と知てやふ人ハやうハ一人有るやうハ無一ハ外の地十九人
ハ皆釋迦と目指して謗るやうハ人ト後世の佛者共のハ

業ハ釋迦と具原の引ハ倒しハあるやうハ釋迦の妻を
三人子と三人持たた事ハどう云ひくらめたハハた活
た眼ハ書と讀人ハ是非其尻ハ見出され其尻ハ
ほと云ふハ五夢經十二遊經佛本行經ハ小慥らふと又
其余ハ維摩經ハ注ハ鳩摩羅什と云ハ然し是ハ
元天竺の僧ハ其言つた事ハ淨飯王ハ釋迦ハ出家を
させしめて更ハ伎樂を増し悦ばしめた所ハ其時著
薩欲心内ハ發ハ羅睺羅胎ハ處ハ耶輸其ハ夜ハ身めりと
云ハ事ハ有るやうハ左ハ此ハ釋迦ハ其ハ歌舞ハ酒ハ遊ハ
小心ハうハ此ハ淫欲の心ハふこりくら下ハ耶輸ハ
うハさうハたハ相違ハいハコト

扱悉達ハ父の淨飯う汁ひて妻を逐へ子さへふうみ教
したる礼共此後又後野遊ふ出たる所死人と擧ふ載せ
て香花と供へ其の眷属の者と見へて哭つは是を送つて
行く是を見て往者爰陀夷と云ふ者ふあ秋ハ何ぢヤと問
ふそこや死人じヤと答へたる所が死ぬと云ふハこよ
た事いヤと云ふは爰陀夷と云ふハ死ぬと云ふハ神
識云り身動うす寒熱とも知ることもある事いヤと答
へたてニヤん悉達が秋と聞て大目小悲とて夫ハ彼の死
人斗り死ぬ事う又余の人とさうと云ふはうら爰陀夷ハ
一切の人皆うくの如く貴賤とも小免りこも能ハすと
云ふと悉達がうら苦く日事の有る小世の人ハ天と悲

りハ心のよいといふハ木石小等ハさうと云ふと云て早
早ふ歸つたといふ事ト云ん但し前後の事實を考へると
す小此時ハ悉達が二十三歳の時と見へるす夫ハ天
人の死ぬといふ事と知らんで居ると云ふハ余りといへ
ハ愚う事ト云ん総て右等の事共ハ悉達が出家したる
元の因と言ひ傳へた事故ハ大らう小虫の死ハのや老
人病人死人等と見て菩提心と獲れたと云ふ事ト云つと
見て置らうい下ニヤん又悉達ハ王の太子とありあるら此
出た名度うふらう不浄の者おと見ら所を以て漢土
の王杯の如く立派な事ハよく今御園下いふら村
村の大在屋と見たやうな者ある事を知らふらりて

さやう不趣小相違ふ故佛經と見ると同輩小見、王
が裁らぬ有つて己小五百の王に度小攻来つた抄中
うまふ事さ一有る下コサハ斯くの如くある所を佛經と
漢土で翻譯する徒不其のしとけある事共いやは小文
と飾り譯し書く漢土さほ小書取て左屋とのとハ王と書
日其う、あとのとハ后と書り又其子とハ太子と書り其
いつた言し吾といふとハ朕とつややう小何とつと漢風
小國にう住居の様子生ずるともろこしより小仰山ら
く書り人小信と起させんとすたより下コサハ佛經と見
小此事としよく心得て讀ぬと其の文章小はうり生て漢
土とどのやう小大そらうらういとと思ふ下コサハ中々

あんふ小結構と事ていふに近くいろが蝦夷カも村々
したう有つて其の村々の前長をオトナと云ふ是は何
百人とつ小程多く有る是と同一さ生下コサハ蝦夷の事と
書くかもしオトナが事をハ王と書りメノコが事と后と書
り其の子が事と太子と書り、書くと殊の外小仰山小見
る下コサハ漢土ハ實小仰山小立派な事下コサハ是ハ譯が
有る又ハ漢學のさ日云ひはせう下コサハ
こくへ悉達ハ弥々出家遁世すく、心小決定して父淨飯
王が前小出てりよ小ハ恩愛集會必、有別離唯願聽我出家
學道不留難と云つたる所が淨飯王大ハ驚り括り物と得
云ハす良父しや云ふ小ハ汝らちしく其の意を息めよ

うふふ多秋ハ年とある若く國小ハ世嗣も有ら然るに我
と委て出家しよふといふ。重くうらぬ事と涙を
ら小諫むる時小悉達がいふハ然らハ吾小四の願が有
ら一ツハ不老二ツハ無病三ツハ不死四ツハ不別
父若し此四願と興へ給ひて出家ハ致すといふ是が
實ハ所謂難題下是下又とやりこのたもの下エカシ淨飯王
こ秋と聞て多自悲し、彼是是生と諫むる所不煩と聞入
秋す悉達いよつ吾が居る所へ引取りハしたるごとし出
家せんとの心ハ決定しや或夜人の寢鎮静するを伺ひ車匿
といふ者一人と連林捷歩といふ馬小乗て忍び出たがえ
其出る時小我若不斷生老病死憂悲苦惱終不還宮不盡恩

愛之情終不還見耶輸陀羅と云て出たといふ事ハヨシ
人て跋伽仙人といふ婆羅門の修行し居る山へ行て馬
より下り身小着たる衣服飾りの品々を脱て彼の車匿小
渡り夫追送たる事を賞て歸さんと教す所ふ此者いふ小
ハ君とらハ小置て吾のミ歸り答つたるうハ定て父王の
答め小逢ひ候はん程小らハ小置さ給へといふところハ
悉達がいふハ汝還て父王小自すべし吾今不為生天樂
故復非不孝順父母俱以畏彼生老病死為除斷故來至此耳
といハ又父王吾ハ出家したる事と早いと言つたるら
ハ老病死空豈有定時人雖少壯焉得免此と吾ハ云つた言
ハと逐一小其の答の仕様述と教つて歸さんとす

車匿ハ猶ハ戀々として還リて居る時小老達ハ聲を
勵まして會者常離の理である故小我ハ生神て七日
母の命終たると見よ母子すら尚死生の別材ある況餘
人とや汝速ニ馬と共に還るべしと教く言つて自ら髣
髴と剃り柄節を束ねて禿師の着てをたらし袈裟を吾
が今まで着てをたらし服とて着て車匿が泣倒れて
居るともう言はず神を拂つて山奥へはいつたユカ此時
ハ二十五歳の時故是を二十五出家といふユカ此出家
の年と諸の經に相違ふ有て或ハ十九出家とも有り又ハ
七歳出家とも有り又ハ是ハ皆釋迦の妄説の塵を結ハ
んとする種小せんとして後世の法師共の好曲小言ひ出

た事下ユカ實ハ二十五歳が出家の年小相違無の下ユカ
そこで車匿と詮方なく涙ありて馬と牽て還つた下ユカ
扱悉達山奥に入て彼の跋伽仙人が修行して居る所へ行
て見ると諸の鳥獸が馴住て飛走らず扱彼の仙人共の修
行と察る所す或有以草而為衣者或以樹皮樹葉而為服者
或有唯食草木華果者或一日一食或二日一食或三日一食
或くの如く自餓の法を行ふ者あり又或水火と事ひ或日
月不幸一或ハ翹一脚或臥塵土或有卧於荆棘之上者或有
卧於水火之側者爰小悉達が其跋伽仙人よそに等ハ今斯の
如き苦行とするがら此ハ何等の果報と求めんとすかの
言と問ふた所が仙人答て此苦行を修するハ天不生也

ん事を欲するのじやと云ふ事にて悉達が又云ふ小
ハ樂しいハ共福盡ると云窮めて六道ハ輪廻して終
苦聚に成るいう事諸の苦因と修して求苦報かと難
てうやう小議論一つ日暮ふも及ひ其夜と一宿して明
且ま不思惟したる所ハ此諸仙人共苦行を修すと雖も
皆解脱真正の道ハあらざらん小留るべき事ではないと甚
所と去て此山の北の奥ハ阿羅邏爵陀羅仙人といふ大仙
人の修行して居る事と聞て夫とて立越た下ニサハ又
悉達が家ハ残つてとつたる耶輸陀羅及ひ諸の女共ハ
眼を覺まして見ると悉達をたらぬうらまづ取おす泣
出し々浄飯王と継母の摩訶波闍波提カバチと告たる所ハ

二人共大子小魂消ゆて地ニ倒れ泣き又浄飯王ハ夫を為
小精魂と失ひ所謂ハ氣絶致したてニサハ所ハ彼の車匿ハ
馬摩を泣きうら小歸て来て具々小右の始末と語りて
小摩訶波闍波提ハ悉達我が養育小依て成長ありふら
そこハ思はす我と捨て跡を隠し去れりと云て泣く耶輸
陀羅ハ我ハ年久しく親人下り行住坐卧相離れず然る小今
吾と捨たり古昔諸王入山學道皆將妻子不暫相棄世間之
人一遇相識別不相忘夫妻之情恩愛之深而及更如是之薄
よと云て泣く其の中ハ浄飯王と氣がついて果して車匿
と叱る事と止めたが兎角小親子の愛情止らたといふ
下也悉達が在所と尋ねんこと下致したるが人と諫る故

王師と云て淨飯王の師と頼む者亦服心の者と多くそへ
遣してまづ彼の跋伽仙人の許へ尋さしむる所を跋伽仙
人よりよふハ淨飯王の太子の何う知らぬ近頃一人の少
沙彌が来り一夜者と議論をたが北の方阿羅邏仙人の
許へ行たといふに王師が又夫へ行く所を途中のむし
山中ハ悉達を樹下ハ座禅として居るより王師其の前ハ
進んで父王の歎きと云て還りやうよりの時ハ悉達を云
ふハ我豈不知父王於我恩情深也但畏生老病死之苦故
来此為断除より父王若し此苦を除きて賜らば歸るべし
さうあり也ヤ中々歸らぬと理つめを云ふ所を王師と云
ふ者ハ色々と理害を説き雖といハバよくわひつゝ口を

いふハ吾ハ是より阿羅邏仙人と道師として生死解脫の
道と求むると云て袖を拂つて一早く山奥へ馳つた下
コヤンそら下王師ハ空しく歸らぬとせぬより思ひついで
其の連なる人共の中ハ橋陳如といふ者と始め五人と山
ハ残りて悉達が修行の様を伺はせて王師ハ歸つたてを
扱悉達ハ彼の阿羅邏仙人が居る山を是よりハ又遠く國
國山川を隔て遠く所あるを厭はず其の途々の國々の王
と王舎城の頻婆娑羅王又摩竭國の鉢沙王是等も皆元
ハ彼の刹帝利より出で同姓達で諫る所が夫と右の如く
聞入す遂ハ彼の阿羅邏仙人が住する所の山ハ尋ね入り
て對面して道を聞けりてコヤン折して天竺ハ於て婆羅門

其の學問とらしめしもの、前小し申す如く婆羅門家の者共
不代々うけ継ぎ致す事下其學びうた、廿歳以上の自分
の家下學問一十五以上小まると家出として諸方と歩む
て學び年四十小成と子孫の断絶せん事を恐じて家へ歸
りて始て妻と持て叔子とし生むと其中小年の五十
少も成ると又復山小入て道と修行する下ゴカ叔其道と
云て修し教あり趣きいふんヤといふ小治心と云て心
とちやんと治むるの修行をりていつと申す通り彼國小
も天津神の天地を始め世小ありと有る事共、其御靈小
依て出來りしじやといふの傳へ有る之を彼國下梵天
王と云ひ傳へて居る下ゴカ夫ハ諸の佛經小梵王是娑婆

主と云ひ或ハ梵王居天子之中以統御為主と云ひ又ハ大
梵王言我生世間と云ひ又梵天王名一切衆生祖父作一切
有命無命物杯やう小云つる言共、其た、有る此古傳
説に有る小依て之を奉りて道と説たしつ下ゴカ故小
其の行と梵行といひ書く文字と梵天の教、たるといふ
事下梵字といふ下ゴカ此梵天王と申すハ即ち皇産靈神
の御事をよく申傳へたもの下ゴカ龍樹菩薩の大論とい
ふもの小も衆生常識梵天以梵天為世間祖父為世人故説
梵天也と有るハ此事下ゴカ又夜見の國の傳へし有る是
ハ彼の國の辭でハ那落といふ下ゴカ其那落といふハ地
の底小有る獄屋といふ事下ゴカ、御國の眞の傳説と違

つて人間生涯善根を積んで後天堂と云て則梵天帝
釋の御許へ生じ又惡事とすれば那落へ行てそゝ居
る所のありける神十王と云ふ責られりといふて
ユツト是等ハ彼の國の古傳説で決して作つて云つた事と
ハ見へぬト云ふればバコトハ様之事ハ慥にいふて
事ハあるにユツト扱せ々の婆羅門家は是等の古傳説を
本として教を立たしものでユツト其のいつち最初小教を立
た婆羅門を衛世師と云て是ハ釋迦よりしハ百年前小出
た人トヤといふ事ユツト此衛世師の後小遣々優々此た
婆羅門家を出て道と弘めたといふ何と天小出する事
を修し教へしものて其内小サトつて立ふた小違つた所を

有て総て九十五種之を佛法より差して九十五種の外道
といふてユツト其の違ふ所といふハ其始め何の事と云く
欲界といふ天有てそゝ梵天帝釋よりす故善を
修して天へ生じよと修し教へたる所と其の次小出た
婆羅門ハもちつと其上といはねば行ひ執ぬ小依て其の
欲界ハ天よりハ上小色界といふ天有る此方小從て道
と學ぶと其の天へ生ずると云つて道と弘めたてユツト所
を其後小出た婆羅門ハ又其上を一層のひよて其の色界
と云ふて此方の修し得たる所ハ色界の上小有る空
所といふ結構あり生ずる法トヤと云つて弘めり扱此
様小其上と云くといひ上げし終小二十八天と云ひ

上げたりののでユエ然りとも實ハ漠然としたりる事下皆よ
いふげん小云つたもの下ユエ有り如く生天の事とおも
といつたるもの故小己小悉達を始てまづ跋伽仙人共小
逢て欲求何果のビヤと問ふた所が仙人共が答て為欲生
天とい答た下ユエ此此時悉達が慕ひ尋ねたる阿羅邏仙
人といゆが立たる趣百二十八天の上小非想非々想天
といふ天が有ると云つて教へたるもので是も此前十出た
る爵陀仙人といふ婆羅門の無所有と云ふ天が有ると云
つて私め居たる所へ出て其上とも一つ越へて非々想
天といふ天が有るといつたもの下ユエ此らのさすか
實ハ子供のいたちエツコとやらとするやうな事下ユエ此又

天竺の國風下兎角不思議奇妙な事うす下其の世間と
教ふる少し彼の不可思議神通をゆうん下人信し不
いふら代々の婆羅門共人小教授下する者ハ皆夫を修
行してやるハ此叔夫と神通といハ甚た聞よ此よ
ふる社とも廣小此幻術術と云ふもの下幻術といまほち
の術と云ふ事下狐也狸のそふしふい物を夫と見せて人
をたふらゆふと同一術下此夫故之を幻術と云ふ近く
云ハバ手裏の火さやうなもの下此事も法華經の妙玄と
云ふもの小如此幻師在此四衢道此幻作種々象馬瓔珞人物等此本
自不在無明所為と有リ又圓覺經の疏とつふもの小世有
幻法依草木等幻作人畜似此往來動作之相須臾法謝還成草

木然諸經教幻偏多良以五天此術頗衆見聞既審法理易明
と有るとよくつくりと考へるふよひてコト

まが釋迦の出ぬ前天竺小元より有た教の趣も極悉達ハ
右の阿羅邏仙人小逢て生老病死を断するの法ハいふ
と聞小大所阿羅邏が答へて衆生之始始從於冥初從於
冥初起於我慢從於我慢生於痴心從於癡心生於深愛從於
深愛生貪欲瞋恚等諸煩惱於是流轉生老病死憂悲苦惱と
いふ悉達又問ふハ其説を聞て生死の根本ハ解し得たる
が夫を断絶する事ハいふと云ハ仙人ハ此生死の本
を断せんと欲するふらハ出家して修持戒行謹早忍辱住
空闲處修習禪定離欲惡不善法離於種々相入非々想處斯

處名為究竟解脫是諸學者之彼岸也汝若以断於生老病死
之患まが小斯の如日の行を修學すべしと論したコト
悉達ハ其説を聞て又云ふハ非想非々想處為有我也為
我也若言無我不應言非想非々想處若言有我々為有知為
無知若無知則同木石我若有知則有深著有深著則非解脫
一切盡捨是則名為真解脫と言ハ初て阿羅邏仙人とひ
と詰て黙然として居たと有りますとよく思ハ此悉達が
言つた趣ハた辨て小任せて言つた事で阿羅邏が説よ
リハ大正小無理不コト夫ハいふと云ハ小阿羅邏が言
つた趣も欲惡煩惱すべし一切の善らぬ事共と離れて
善心小歸するると云て其の善心も止めよと云ふ

の説で、あるい故に悲想と云ふは欲惡の想の如く、ある事
非々想と云ふは世の為人の爲に、ある善事を、想の如く
あるい夫の想と云ふは心中に非想非々想天の法と云ふた
もの、下らゝの場へ學びつゝた者、學問の彼岸に到つた
のは是が解脱と云ふもの、じゃと云ふの心で、云ん随分
不事下面白いでござん又悉達と言ひ云ん、無理じゃと申
す譯、悲想悲々想處、爲有我也、爲無我也、言無我不應言悲
想悲々想處と云ふたは、是は知れた事下、云んあせと云ふ
は悲想悲々想と云ふ譯、右中にたる如く、惡欲不善ある
事、思ふまい善事と云ふ想と云ふの義、云ん依て爲
有我也爲無我也と云ふもの、あるい又若言有我々爲有

知爲無知若無知則同木石と云ふたは、知れた事で悲々想
といふ、云ん有我と云ふ義ある事論、あるい有我が此
は有知、是又論、あるい夫を何も無知則同木石杯と口多
く申する事、あるい又若、有知則有深著有深著則非
解脱といつたは、即ち悉達、趣意、是は何の事も無く阿
羅羅、非々想と云つて善事を、思ひぬと云ふ譯で、無
い夫の想と云ふたは、立た立た筋を氣に入らぬ、云ん出た
事で、已れ、生老病死を遁れたいと云ふ、親妻子と云ふ
り見ず惡事、元より露のさ、善事を、云ん想ふま
いと云ふ、祈りけ、心より、云ん破つた、云ん又能一切
盡捨、是則名爲真解脱、云つたは、此通り、云ん一切盡く想と云

小事とバ捨て果てしきつたありといふも悉達つた
通り夫の眞の解脱は有ませうが斯く天地の間小學生
社て一生て居るうちにとり死してそ社に決して出
来ぬ事でも其出来ぬ事故さやう小心なけり親妻子とさ
一小捨て山小入つたら此の男が口此通り立派小鏡舌
りけ社なし己小今阿羅羅小つた言ふも無知則同木石
と云ひ又一切の想ひを捨て果ぬらまづ阿羅羅の説を
氣小入らぬといふ想もあり叔生老病死がさといふもの
やその想もあり又此次の會小出まふ此阿羅羅の許を
去て修行する時小物さへ喰ひんてりきんて見たらひと
小くてたまらぬ既小死さう小成つた時小牧牛女小乳を

貰つてしやあり夫下命を助うつたで昇にさす社バひも
しといふ小想も無くるやせん叔年が寄つた社バしと
くた防主もありとりて其の死ぬ時とやう痛やアう苦し
やとこの多ううて死をつたでやん何と是は生老病死
一切の想と盡捨てたといふものごとく捨てられるとの
う捨てふ社ねらづ忘ら社ぬ譯は天津神の産靈の御靈小
依つて此天の下小生社ていといふ捨らふの掛ひ落さう
のとあせつた駈て廻つて生老病死の四つのおつらち
ぬかやん然るを悉達ふ心得違ひを致してア大づらほ
うあるらふア、くそたさけあちうふけつた毛小火の付
いたやう小夫といやうりあつて駈いたふ矢張死人だ

其様とつり思へばちやうと俗の諺云ふ一つ長屋の
左二兵衛と申す四國を廻つて四國を出られず廻り
て猿と化すと云ふやうなち下其のいひ置きたる説
共ハ只小世の愚人と云ふを惑はす種々成つたのこの事下
コヤン尚ほ追々こころ事々エヤル

扱悉達ハ阿羅邏仙人を調伏し夫より伽藍山苦行林中
入て尼連禪河と云ふ河の側小静座觀想して苦行を修し
日小一麻を食し或ハ一米を食し或ハ二日又ハ七日小一
麻米を食す爰小彼の王師を遣し置たる橋陳如等も悉達
と共に苦行を修し人と遣はして王師及び彼の長臣も悉
達が所行を具小云ひやりける小王師と長臣ハ國小還り

悉達よりつる言并小其の苦行の事と淨飯王小い一つ淨
飯其の言を聞て身と顛動し身の毛を墜て聲も絶々小歎
息悲言云へ小得出ぬ事ありと良久とありて云
へるハ悉達ハ是吾も性命あり然る小汝等今渠を伴ひ歸
らば我も性命如何し存カよふに存カ小時小王師も悉
達が志の堅固ある事大山の如く中々移動し難き事をい
へば淨飯王ハさうも有りぬハ衣食住の具一切を多くめ
車小積り彼の車匿小申付汝是を悉達小興トて供養し之
少事シのありやう小致せ盡たりん小ハ又請ふよとせと云
て送り遣したコヤン扱車匿ハ悉達を修行する所へ行て其
形を見たる所が骨と皮ばかりのやう小瘦さらけつて血

脈と悉く小現ハ秋て居る程の事故車匿ハ涙を銜んで淨
飯王の日夜小歎き悲て忘る事能はず是等の物と送就
る事と迷たるとき時小悉達云ふ小吾ハ父母小違ひ又國を
捨て遠く去り小在る事ハ至道と求めんが為ふとての事
あり何故故小うゝる品々を受ふやと厳しく云ふら
車匿ハ思ふ小ハ是下ハ此の品々を受ふやと悟て右
の品々を悉く淨飯王の許へ返して送て吾一人ハ彼の憍
陳如等と共に慧小在りて悉達ハ苦行を見つゝいたと云ふ事
てコサハ是程小父の厚き志を無小して返してやるとハ叔
悉達ハ心無き者でコサハ食すハ食人でもよいと受て置
いて父の志を慙る人の子たる者の道下コサハらんふ小

瘦さらばけり居るハ嘔り心中小あつて喰たらうた
下ありふ下コサハ所を一旦何と入らぬ食物も喰ふまいと
云ひ出したわる我慢を張てのこと、見つる下コサハ此
の實小諺小云小瘦我慢でコサハ叔悉達ハ早く婆羅門等
説と看破つてある小坐禪觀想小身と苦りめたハ如何小
と云ふ小まづ彼の念ひ極めたる生老病死を解脱しつ
神通を大り小修し得て夫を以て婆羅門共を伏させん
為下コサハ夫ハ即ち大論小若不苦行而呵言非道者無人信
受故自行苦行過於餘人と見へ又西域記小ハ太子思惟至
理為伏外道節麻米以支身六年とあるハ此事下コサハ又
中下外道を伏させんとすハ如何小と云ふ小彼の外

道の輩、國人小普く信トられ居る者故、其の外道
より伏させ、道を説ね、弘まりぬ、その事下ヨサレ又夫
を伏させ、小神通を以てする、いいうふと云ふ、小夫と神
通といふ、大、その小、聞ゆれども先、申たる如く、噴ハ
幻術といふ、その幻術といふ、彼の丹覺經の疏、小
諸經、教幻偏多、良以五天此術、願衆見聞、既、寄法理、易明と在
て、五天竺といふ、此の幻術、頗る多、事下衆人見ると、聞
む、其て居る事、故此の術を行、其の奇怪、小目を驚、心
を惑、り、説つらると、人信を發、してよく會得する、故
より、其人を論、したる、い、やといふ、の義、釋迦より、前、
出たる、婆羅門、其皆是を以て、人を服させたる、て、ヨサレ

故、釋迦も、其を専らとや、らん、其の道を行、其ぬ、小
より、六年の修行、小、其を第一と修行したる、の、下、ヨサレ
石、其、即ち、彼の龍樹菩薩、著、したる、大論、小、鳥、無、翅、
不能、高、翔、菩薩、無、神通、不能、隨意、教化、衆生、と有る、此文、と考
へて、釋迦、法師、の、神通、を行つたる、故、と知る、が、より、下、ヨサレ
叔、又、神通、の、出来、を、觀相、の、仕法、ハ、其、と、大論、小、菩薩、為、衆
生、取、神通、現、諸、希、有、奇特、之、事、令、衆生、心、清淨、何、以、故、若、無、希
有、事、不能、令、多、衆生、得、度、菩薩、作、此、念、已、繫、心、身、中、虛、空、滅、色、
重、色、相、常、取、空、輕、相、發、大、欲、精、進、心、智、慧、籌、量、心、力、能、舉、身、未
籌、量、已、自、知、心、力、大、能、舉、其、身、譬、如、學、慧、常、壞、色、塵、重、相、常、修
輕、空、相、是、時、便、能、飛、二、者、亦、能、變、化、諸、物、令、地、作、水、水、作、地、風、

作火火作風如是諸大皆令轉易令金瓦礫瓦礫作金如是諸物各能令化變地為水相常修念水令多不復憶念地相是時地相如念即作水如是等諸物皆能變化と有る此を能く考へるがよひ下ヨサ人と手妻の大きいのる幻術不相違ふい下ヨサ又右申す通り釋迦以前の婆羅門共何れも此幻術を以て道を弘めたる所其世の人聞知らぬ佛道と云ふ事と作為して又復同じ神通と借りて弘めよふと為る事故以前とい事より大に離れたることと云ふは此の下ヨサ大論小種々諸物皆能轉變外道輩轉極久不過七日諸佛及弟子轉變自在無有久近とある此事下ヨサ釋迦の神通自在なることと諸

經小毒人見一なる中瑞應本起經と云ふ其の状を言短く小云と云つて有りませう夫は所欲如意不復用思身能飛行能分一身作百作千至億萬無數復合為一能徹入地石壁皆過從一方現俯沒仰出履水行虛身不陷墜坐卧空中如飛鳥翔立能及天手捫日月涌身平立至梵自在眼能徹視耳能洞聽意預知諸天人龍鬼神蚊行蠕動之類身行口意言心所欲念悉見聞知と有るうらいう小勝れたことと云ふた下ヨサ此神通と云ふもの大論小有る通り觀想小身と苦めてよく修行すれば出來る事と見つる下ヨサ夫はごうして出來ると試す云つて人の通りぬ深山幽谷杯小ハ魑魅魍魎と云ふ天狗と云ふ類の奇しき者の多し此ハ

修行するうち小つひく夫等の物と馴交り又夫と使ふや
う少しある事と見へるでヨサレ夫ハ先日申た釋迦う始
て跋伽仙人の所へ尋たる時諸の鳥獸を馴住で飛去らす
小居つたと有りを知るヨサレ御國の古小うける
事の見へたるハ書紀の皇極天皇の御卷小高麗へ遣し置
きたる鞞作得志と云ふ者彼國小於て帝を友として其幻
術を學び取り或ハ枯山と変しハ青山とる或ハ地を水
小変し此外小種々奇しき術を覺へたる所ハ帝ハ其針を
授け云ふ小ハ慎々以テ知らずる事と勿執是を以て病を
治したるハ愈ぬと云ふ事ハあるまじいと云つたでヨサレ
其ら得志の帝の教の如く為て治する小悉く驗有た

と云ふ事ハヨサレ然る小得志ハ其針を大切し柱の中
小隠し置いたる所ハ後小彼の帝がとと思つた其の柱
と折て針を取て去たると云ふ事ハ有る是等と以て考ふる
小釋迦も帝ハ何ハ針でも貫つて持た事と見つるで是
叔佛法ハ御國へ渡り御國の法師共も其幻術を受續下や
つたもの下ヨサレ夫ハ菅原寺の行基叡山の傳教高野山の
弘法淨藏法師其外幾らも有る下ヨサレ近ハ御嶽山と開
いたると云ふ僧也金毘羅信心ハヤの或ハ道ヲ信心ハヤ
のと云ふ輩ハ其のあたり神通ラハ事をやると見れハ
随分苦行とさへすれハ出來る事と見つる下ヨサレ然れ共
釋迦程小離れた業とせぬハ修業ハ足らんであらやう

小ハ出来ぬのう若クハ出来ても今ハ幻術と云ふ事ヲ知
れテ来た小より縛られんハ怖サ小離れた事とバせぬ
のう何れ小も深山幽谷一行テ難行苦行をシテ年月を累
サ收一心小觀想をすれバ大論小有る如ク出来小違ハ
ハ五いと見ツる下ユル又彼の役エヒの小角杯の輩ハ前鬼後
鬼と云ふ者を使つたとあるうラ本より狐遣りと同一
事又阿部晴明ハ式神と遣ハるれテ不測を見せたと有
す此式神と云ふハ死人の靈と遣ハる事と見ツるうやう
の業する輩者ト僧共ハともより外ハと多く有ま
レ其うち法師の位より僧ハ下ユル夫ハ中頃の書と讀
テ見ル小高貴の御方の御懐妊と云聊テ御不快と下し云

小と大らたハ物怪ヲ付ス下ツト法師共小仰せ付ら
れテ祈を成させ小御快氣有た所と見れハ法師共已
業ト其の物怪を付まらせて其の祈を致し私せんとの仕
業ト下ユル又小違ハのふい證拠ハ兎角上様小違ハうり物怪
の崇り有下下さま小ハとんとる下ユルと云ハて
坊主共ハ為る事有ると知るが宜し下ユル是ハ今世小
ト僧也修驗者杯云小奴等ハ此の謀事を行ハ已れ狐を付
りテ其の狐をおとす祈禱を受合ハ物取者ト云ハ有
下ユル是等ハ矢張幻術の流下多クハ佛法より傳ハ来た
こと下ユル然れ共ハ此を神通と云ふうラ何ラ香リけ
小思下居る人ト有るハ此ト云ハ元來ハ邪法故上の御咎め

ても有て縛られしもするところと神通も何と知らぬた
のくと同じ様小いくぢもふく縛られ既小山伏の方杯
でい神変大菩薩と云何と云てさわく後の行者でさ
色々おう一五事と致して天皇の勅命小い何の手もふ
く縛られ何豆の島一流されちりこ成て居つた下
是と元亨釋書杯小い勅命下て小角と捉つたふと
た所空一上つて飛去たる故捕つる事ふりあるた小
うつて其母ととうへ縛つた小あつて小角は是非ふく
捕つられ杯と云て有るが皆空ごとでユサニヨリヤぢふト
也と云ふ小高き凡人の為小役せらま使出るやうふ前鬼
後鬼々らあるの賤小い妖鬼の仕業故とて其人を救ふ程

の事も無く又悟り深く威徳の有る人小い手も足も出る
こととやふい下ユサニヨリヤぢふト
叔悉達ハうく坐禅想より神通の修行工夫小苦行と致
しつ、月と経年と経て殆んと身も枯木の如く小瘦衰ハ
たふ老病死苦ハ解脫する事能はず只修し得たる者ハ神
通はうりあふ小思ふやうハ吾うばうりの苦行を修して
既小六年小垂とすう未だ生老病死を解脫するの道と
得ずさす小真の道でハあうつたと見へるころ是ハ昔
洞浮樹下小於て傷虫の鳥小啄る所と見て思惟したり
し趣小如ざる事と悟り彼の時の思惟小欲と離して寂靜
ありん事と思つたのが最真正の事下有るよと云つた

二見

トコナル此の語不依て考ふれば彼の生老病死ハ解脱する
事成らぬものト云ふ事と此の時始て發明したと見
るトコナル吁のちりあるうふ沙婆悉達其の頑愚なる心
より脱出する事のやうと思ふ長々の年月とひと
い思ひとして見たら更解脫する年とるまふ
身の様子と違て来たうらそらで始て目覚めて離欲愛寂
靜の道より余小修し得らぬものと珠數と投たものと
トコナル是分のちりあるうふ何て有まやう扱離欲愛寂靜と
修し得たをうらそらで是までの婆羅門仙人共やうた所
とさしと度る事とふく我慢をやつて物食らるんたうむ
とふいうらそらに負惜しと思ふ小ハ今我若以此羸身而取

道彼諸外道當言自餓是涅槃因我當受食然後成道と念ひ
定めた事あるトコナル此の文小涅槃と有るハ死る時の事
トコナル釋迦が死ぬる時の事を記したる經と涅槃經と云
ふこと此故の事又釋迦が死ぬる時の像と涅槃の像と云
ふこと是故トコナルト云ふ依て此文小涅槃因と云ふハ頓て
死ぬるものと云ふ義あるトコナル又取道と有る道と當
成道と有る道と道と云ふハ事々いふ悟りの道と得た
りと云て此の苦行を止る事と云うやうト重なるト云つ
たのこの事ト云ふと深い譯ハ無いトコナル佛經と讀む人
ハ云ふおとと喰ハぬやうト云ふ前後と考通して文
小拘りう義と取らる宜しいトコナル扱一体の語の義ハ

我試若し此の瘦身と其のまゝ小キの苦行と止たるらば
彼の婆羅門共々誇つて又我見たる為とけとるらぬ事と
為て自れをすまひで餓さうほつたが又我の因と成つて命
ハ死んであらうといはふうらむづ食を食て力を付て後
小此の苦行ハ止めて生死解脱の道を得たりと披露する
ふよいと念定のたとふの義でニヤハ是う負惜してよく
て何で有ませう人の噂や後と前と考つて取繕ひ已か
今までの阿房と文らんとする悪念の有る人ハ佛の有
るものハ物食ハんでいひのくたすらす又生老病死
と解脱する事とあつぬと有体小すれはよい小是ハ憎い
てニヤハ叔右の如く念の定めて座より起て河小入て垢た

らけ風ならけが骸と洗ひ落し叔河より上らうとする所
ハ身體羸瘦不能自出とあつて上り得ずアツクくく危ぶ
あく土左衛門小成らふとすて居るうら人と樹の枝ハつ
らまはさして攀出しやのたでニヤ叔河より上て
もらた所が垢ハあちりたらふ彼の本文ハ消瘦皮
骨相連血脈悉現と若枯木と有る如く眼ハ窪む腹ハ
背小ひつほくあげら骨ハ出る頬がこけて首まよと云ハ
粟のいざとこ名臺ハおつとすたとつ小やう小イヤ其
の形ハ見られたるものハあふいら小於て一人の牧牛女
の其の名ハ難陀婆羅とすふ之を見て不便さやる方毎
うつたと見つて乳糜を取てら乳た下ニヤハそらで悉達

其の施と受て甚悦びよく嬉しむつたと見つて其の如
小對て礼小咒願と唱へたて。云ん

咒願と云ふ

其の趣ハ今所施食欲令食者得充氣力當彼施家得勝得喜
安樂無病終保年壽智慧具足と云つた云ん此の咒の義ハ
今此の吾小施しや吳る所の食ハ食する吾が身の氣力と
充しむるをりてよく施しや其た功德小依てるあた
と喜と得て安樂無病下一生無難小壽と保て智慧と具足
であらふをとりよの心で云んまづい礼の云ひやうで云
頭て蠅と追小やうは成つてりやうてたまらするなる
い時よまづい物ある馬の屎下し喰ふ氣小成つて居る所

一うける馳走小預つたる事故悦びさうふもの云ん今
の世やとたまふ坊主小一文やると此の文と唱へて行
く者ら有るハ此の故下云ん但しよく小憎いことの有る
ハりやい所一うまき物と下され有り難いさう有り難
い下よふんすハ其言ハ我為成熟一切衆生故受此食と云
ひ居つた云ん其言ハ我為成熟一切衆生故受此食と云
つた下云ん是が何ん小やういと云ふの下云ん斯く
云ひつ、夫と受て食つた所が身體丈夫小成る大き小氣
力を得た下云ん但し右の如く河小まぶさうして居る所
と人が憐んで揚げやうたのを天神が攀出したのや
と云ふ又ひりやうて居るを不便小思つて牧牛女が乳

麁と云れたれを淨居天と云ふ天は此の如く勸めて云れ
たれたの如く云つて云れは有りて無く何とも實事
とバ諸天の如うしたの淨居天さうしたの奇妙不測
小託して重く云く記し有るが皆後うら云ひそくた事
下取る小足らぬ偽り下エカん夫程諸天を付纏つて居るふ
らバ悉達小らんたわけを盡さぬがよいでエカんソリヤ諸
天でもあいと云ふもの下エカん斯て悉達ハ畢波羅樹と云
ふ木の下ある石上小坐して

受胎盤ハ閻浮樹とあり又一ハ菩提樹と有り
我道不成と云く起つまいと念ひ定め彼の乳糜と云
ふりの在る小四十八日結跏趺座したと云ふ事下エカん

あり小と云大と云不唾かしたる有るを此ハ悉達ハ斯く
の如く居つたりと居つたる故其の徳の重き故小大地が
勝ゆる事能はぬ下ゆくと震動した所が其の響で大地
の下に居る盲聾龍の兩目が開いて明らふるり過去七佛
の出世したる時と此の瑞應が有た小依て是ハ何を佛の
出世と思はると云て地より涌出して悉達ハ足を礼して
偈と以て讚たると云ひ又其通り大地が震動し悉達ハ眉間
より大光明を放つた小あつて六天の魔王が其を見
て是ハ佛の出世と見つるが事やハ吾ハ魔道を行ふ妨と
ある事と云と云て吾ハ配下ある数千の魔共小申付け又
自も色々と悉達ハ成道と妨りんとした其共と云く悉達

小降伏せられたりの此の餘少し仰山ある偽はこり云て有
る可皆釋迦小重ミを付りよふと云つた事で一ツも取
る小足ちものいふイヤ

出定笑語講本一終

